論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	金　山　健　一
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

ピア・サポート研修・活動が要支援学生の成長に及ぼす効果

論文審査担当者

主　　査　　教授　　栗原　慎二
審査委員　　教授　　井上　弥
審査委員　　教授　　岡　　直樹
審査委員　　准教授　児玉　真樹子

〔論文審査の要旨〕

ピア・サポートは北米で始まり，近年，日本国内においても拡がりを見せるようになった（中尾・戸田・宮前，2008）。本研究は，ピア・サポーターとして活動する大学生のなかに一定の割合で存在する，自らが支援ニーズを有する要支援学生に焦点を当てた研究である。

ピア・サポートプログラムは，大学でも2013年度には大学全体の43.6％（日本学生支援機構，2013）で実践されている。しかし，こうした実践の拡がりに比べて，成果報告（山田・森，2010）や客観的なデータによる効果測定（近藤・坂井，2006）はまだ十分とは言えず，特に対照群を設けている研究，ベースラインを設定しての研究も見当たらない（戸田・宮前，2009）。大学を対象にしたピア・サポート研究は，小～高校と比較すると少なく（松下，2013），大学生ピア・サポーターにどのような効果があるかの測定はあまり行われていない（小手川・松田，2008；吉川・脇田・門田・藤井・三宅，2007）。また，ピア・サポートプログラムは支援・援助活動に適する精神的に健康な学生がピア・サポーターとなることを想定した活動であり，実際のトレーニングプログラムや実践活動もその前提の上に展開されている。しかし大学生ピア・サポーターはそうした一般学生ばかりで構成されているわけではなく，自らが支援対象である要支援学生が含まれているのが実態である。研究についても要支援学生に着目した研究は確認できていない。そこで本研究では要支援学生のピア・サポーターに焦点をあて，「ピア・サポート研修・活動が要支援学生の成長に及ぼす効果」を明らかにすることを目的とし，以下の 4 つの研究を実施している。

【研究 1】　要支援学生と一般学生のピア・サポート研修の効果の比較

1 泊 2 日のピア・サポート研修を行い，調査を，研修前，研修終了後，研修終了してから 1 カ月半後の 3 回実施し，要支援学生群と一般学生群の 2 群を比較した。調査内容は自尊感情尺度（Rosenberg,1965），共同体感覚尺度（高坂,2011）を用いて，「自尊感情」「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」を測定した。研修前後を比較すると，一般学生，要支援学生ともに，研修前より研修後に 4 つの尺度で有意に得点が向上し，研修効果には差がなく，研修は合同でよいことが示された。

研修 1 カ月半後の調査より，一般学生，要支援学生ともに，自己に関する「自尊感情」「自己受容」は向上するが，他者との関係性が伴う「所属感・信頼感」「貢献感」は低下することが示唆された。また，要支援学生の標準偏差は一般学生より大きく，多様な捉え方をしていることが推測された。

【研究 2】　要支援学生と一般学生のピア・サポート研修・活動の捉え方の比較

研究1を踏まえ，要支援学生，一般学生の研修・活動の捉え方の比較をした。具体的には，要支援学生と一般学生の双方に対してピア・サポート研修・活動の捉え方についてアンケート調査を実施し，内容分析をして比較検討した。その結果，要支援学生と一般学生はそれぞれに成長していることが確認できたが，要支援学生は「自己成長」，一般学生は「つながり」を求めていることを明らかにした。また，一般学生は「相手への伝え方」「コミュニケーション力の向上」を自己成長と捉えているのに対し，要支援学生は「人前で話すことに対する苦手意識の克服」を自己成長と捉えており，一般学生と要支援学生では，同じ「自己成長」のカテゴリーでも捉え方が異なっていることを明らかにした。

【研究 3】　要支援学生と一般学生のピア・サポートに対する PAC 分析による態度構造の比較

研究2を踏まえ，研究 3 では PAC 分析による態度構造を検討した。

アンケート調査協力者に，「ピア・サポート活動・研修で学んだこと，成長できたこと，活動して感じたこと，課題・問題など，頭に浮かんできた言葉やイメージを自由に，付箋に 1 項目ずつ書いてください」と指示し，PAC 分析を実施した。その結果，一般学生・要支援学生ともに研修を肯定的に捉えていた。一般学生は活動に対して，困難を克服しながらも最終的には達成感を感じ自己成長に結びつけていた。しかし，要支援学生は活動には苦手意識があり，要支援学生を支援する際にはこの点を十分に配慮すべきであることを明らかにした。

【研究 4】　要支援学生と一般学生のピア・サポート活動の効果の比較

研究3の結果より，活動への関わり方の違いがピア・サポーターの成長に関与していると考え，研究4を実施した。具体的には「自尊感情」「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」がどのように異なるのかを検討した。「ピア・サポート活動に不活発だった要支援学生」（活動無×要支援学生），以下（活動無×一般学生），（活動有×要支援学生），（活動有×一般学生）の 4 群の比較検討をした。その結果，（活動有×要支援学生）は，（活動無×要支援学生）よりも「所属感・信頼感」「貢献感」「自己受容」が有意に高く，成長していることがわかった。ピア・サポート活動への積極的な参加が，要支援学生に良好な影響を与えている可能性を明らかにした。

本論文は以下の点で評価できる。

第一に，これまで大学におけるピア・サポート研修・活動については研究自体が少なく，とりわけ要支援学生については研究対象とされてこなかった。こうした大学でのピア・サポート研修・活動の在り方について定量的な研究を行い，とりわけ要支援学生について，その特徴を明らかにした。

第二に，本研究では，ピア・サポートが一般学生ピア・サポーターばかりでなく要支援学生ピア・サポーターにも効果があること，また，両者がともに研修・活動することが要支援学生ピア・サポーターにとって意義があることを明らかにした。

第三に，要支援学生ピア・サポーターについては，活動に参加することで成長が促進されるが，一方で活動への苦手意識も強く，研修・活動の手順・内容の構造化，小さな目標を設定し成功体験を積ませながら自信を付けさせるといった配慮が重要であることを明らかにした。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成　28年　2月　17日